



Title	研究法としての調査事例研究の試み
Author(s)	松田, 康子
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 147, 95-104
Issue Date	2025-12-24
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.147.95
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98606
Type	departmental bulletin paper
File Information	09_1882-1669_147_7.pdf



研究法としての調査事例研究の試み

松 田 康 子*

【要旨】 調査事例研究法とは、筆者が考案したオリジナルなインタビューを主とした一事例報告である。本報告では、この調査事例研究法の手続きを詳述し、省察を行なった。調査手続きでは、調査協力者に出会うまでの準備から、実際のインタビュー調査の構造、分析過程を記した。インタビュー調査の構造は、1回60分程度の非構造化面接を2回実施し、2回目は、1回目のインタビューの内容を読みながら、調査協力者が自発的に話し出す物語を聴きとる方法である。次に、論文執筆の要点を記し、調査協力者へ調査結果の報告をするまでを記した。考察では、先行研究を参照し、結果を綴るときに留意すること、質的研究法における調査事例研究法の位置を論じた。一事例における調査事例研究法とは、文脈重視の認識論に立ち、「一般性」とは異なる「類推」と「転用可能性」に道を開く研究法であり、理解のカタを多様に活性化させることに力点を置いた方法とまとめられた。一方で、方法論にまでは至らぬ課題が残った。

【キーワード】 質的研究,研究方法,調査事例研究

I. 研究目的と方法

筆者は、利他と応答性を基本とする臨床を第一に、臨床・研究・教育の三輪が寄与し合い、軋みなく歩む道が容易ならざる情景を経験するなかで、模索し試行錯誤を重ねてきた。

本稿では、活路を見出すべく編んできた調査事例研究法（松田2019,2021a,b,2022,2023,2024）を実施、検討しながら重ねてきた、その独自の手続きを詳述する方法をもって、省察し、考察として今後の課題を明らかにしたい。

II. 結果—調査事例研究法の道のり

1. 調査事例研究を始める

調査事例研究法とは、インタビューを主とした一事例報告である。従って、まず、調査協力者と出会うプロセスが重要となる。出会う場として、フィールドを拠点にする場合は、フィールドのこともよく知っていなければならない。フィールドの制度的な成り立ちや歴史を知ること、活動を記す資料や論文にあたり、その時代背景を知ること、地域性を知ること、構成する人たちのことを知り、調査者もまたその場に赴き身を晒し知ってもらうことは欠かせぬ営みとなる。居続けながらフィールドノートを記すことも下準備の一つとなる。その上で、フィールド組織の掟に沿った許可を得る（松田2019,p.69-70）。インタビュー協力を依頼したい人はこれらを丁寧に行っている過程で、自ずと定まってくるものである。

* 北海道大学大学院教育学研究院 特任教授
DOI : 10.14943/b.edu.147.95

フィールドへの依頼、調査協力者への依頼、いずれにしても大事なことは、何より研究における問題意識について心を尽くして伝えることであろう。さらに個人へ調査協力依頼をするときは、断れる関係性が留意しながら、中断できることを伝え、断る方法を複数提示する。自由意志といったところで、断ることの心理的コストが軽くなるとは限らないからだ。

2. インタビューをする

インタビューは非構造化面接である。最初に問いを一つ投げかけたあとは、その場の流れに任せる。1回60分程度のインタビューを基本2回行う。2回目は、1回目のインタビューの内容を読みながら、調査協力者が自発的に話し出す物語を聴きとる方法をとる。

いずれも、インタビューでは臨床における面接の基本となる傾聴が主となる。同時に、インタビュアーにとっての、今、ここでの気づきを言葉にして返すことを心がける。その頻度は決して多くはない。肯定を期待するような、決めつけるかのような文脈にならないよう、細心の注意を働かせ、言葉遣いや声の調子を意識しながらの応答である（松田2023,p.38）。大概是インタビュー後半で、かつ、インタビュアーがずれた応答をしていて、インタビュイーがそこに否定や修正を挟みつつ、互いに確かめ合おうとするやりとりとして表れる。

以下の例は、美川さんとのやりとりの一場面である（松田2023,p.52）。

〈へええ,,, なんか、今、今,,, 今日、こうやって話をして、思い至ったのは,,, 最初に、興味があるって（うん）というのは、自分自身についての一、こうなんか、責任の果たし方、みたいな（うん）、（中略）体験発表は、その、責任のとりかたっていうか（うん）、こういう、ふうに、わかってきたよっていう（うん）、責任の取り方なのかなーなんていうのは、ふうっと今、頭に浮かんできました。。。。〉

「責任,,, 責任の取り方って,,, そんなに、責任が,,,,,, 負ってるもんでもないなー、普通、自然,,, （あ,,, はい）自然,,, だねー。」

〈あああ、そっか、自然体でしたねー（うん）。ああ,,, そっか。。。。。。〉

音声データを文字化する際は、フィラーも含め、声を忠実に文字化する。多様な笑い声や相槌は記号化せずに音に近いひらがなで表示し、インタビュアーが感じたこと、その場の情景、感じたことについても記し、逐語録を作成する。雰囲気、沈黙、振る舞い、仕草、物音（例えば指輪と机がぶつかるコツンという音）も文字化する。

音声から文字化する作業は、その場を思い起こし自らの感覚を呼び覚ましながら営む分析作業ファーストステップでもある。効率化を求めるあまり、自ら収集した音声データの逐語録を他者に（業者に）依頼するのは、大切な分析作業を逃していると言わざるを得ない。

ここで、個人情報取り扱いを挙げておかなければならない。固有名詞の匿名化、記号化である。時に調査協力者ご本人が実名でも構わないとおっしゃる場合がある。たいがいは命名の相談を持ちかける。しかし、研究協力者であるひとりの人との対話を重ねるうち、綴るほどにその人が居ることへの畏敬の念は増し、生きた証、そして誇りでもあるなまえを伏せることへの疑問が生じてくる。調査協力者を盾にした主張は卑怯じゃないか、公開リスクとして危惧

される誹謗中傷を回避するためと宥めてみたにしても、葛藤は熾り続ける。

フィールド名の匿名化についても同様である。松田（2021b）は研究協力者やNPO法人理事長の承諾を得た上で、説明を加え、フィールド名称の匿名化をせずに報告を続けている。全て実名にすべきであると乱暴なことを言うつもりはない。報道やルポにおける実名報道の是非とは違うとはいえ、熟考を要することだけは記しておきたい。

2回目インタビューでは、1次データ（逐語録に前述の匿名化を施したデータ）を見ていただきながら話をお聴きしている。大概20ページを超える分量となる。読むも一苦勞。そこで、少しでも読みやすくするために、大まかな話の区切りのところで1行開けたり、話題の中心になっている事柄を見出しとしてつける。黙読を続ける人もいるけれど、大量の文字を読むことはかなりの労力を要するので、調査者が読み上げることもある。1回目インタビュー内容が呼水になり、自己内対話が促進され、深まる物語が綴られていくこともあれば、連なる連想から別の話が展開することもある。思惑から外れ、同じ内容を繰り返されるだけの場合もある。しかし、決して済んだ話として流し聴きするようなことはしない。その繰り返しに本人の強い思いや、秘めた願いが込められているからだ。

3. 分析データ化作業

調査協力者の確認と削除要請を受け改訂し、承諾を得たものが2次データであり、分析データとなる。2回目インタビューで得た1次データも、同じく確認作業を行うが、録音はせず、調査協力者から削除要請を受け修正し、承諾を得て、分析データを完成させる。この承諾プロセスにおいて、重要他者の確認（例えば同居するパートナー）もときとして必要となる（松田2024,p.80）。

4. 分析をする

分析シートの例を下の図に、松田（2021b,p.109）の分析作業①～⑤を記す（松田2021b,p.109）。

1回目インタビュー				2回目インタビュー			
No.	分析データ1	コード	No. 1、感じていたこと 2、感じたこと	No.	分析データ2	コード	No. 1、感じていたこと 2、感じたこと
1	調) ○○について、お話しください 協) ふううん						
	話題A	話題Aコード名	-2 分析シート作成時に 感じたことを書く	1	話題Aに関わる応答 (黙読といった行為も含む) (例) ページを捲る音が続く	コード名	-2 分析シート作成時に 感じたことを書く
	話題A						
				1 協) 話題Aの内容の続き			
				1 協) 話題Aの内容の続き			
2	話題B		-1 分析データに記され た内容	2			
3	話題C			3	話題Cに関わる応答		

- ① 分析データを精読した上で、ワードファイル上で一つの出来事（意味単位）ごとに改行で区切りを入れる。
- ② ワードファイル上の分析データを図に記す分析シートにコピー＆ペーストする。
- ③ 出来事（意味単位）ごとに区切った分析データが一つのセルに表示しきれない場合は、セルを分けて表を整える。この作業の際にも、分析データの区切りについては再検討・再修正をする。
- ④ 分析データを精読しながら、それぞれの出来事（意味単位）にコード名をつけていく。この際さらに分析データの区切りについて再検討・再修正をする。分析データに記さ

れた「1, 感じていたこと」に関しては、別の列のセルにコピー＆ペーストする。さらに、出来事（意味単位）の区切りをつけコード名を付ける作業を通して気づいたことは、「2, 感じたこと」として同じ列のセルに記す。

⑤ エクセルに保存された分析シートをもとに、ワードへ結果を記述する。

作業①は、2次データ作成過程で仮においた「大まかな話の区切り」とコード名を改訂するところから始める。さらに②③の作業をしながら再改訂を行う。「大まかな話の区切り」は「出来事（意味単位）」となる。④の作業でつけるコード名もあくまで仮である。コード名は分類名にせず、内容が想起できる述語や形容詞を用いた表現やIN-VIVOコーディングにする。インタビュー時に感じていたことを分析データに記している場合は、「1, 感じていたこと」としてNo.列に「-1」と入力し、隣のセルに内容をコピー＆ペーストする。②の作業は、ただデータをなぞっていくかのような作業ではあるが、インタビュー時には、十分意識できていなかった応答のずれや、言葉の言いかえなどに改めて気づく機会となる。データ分析の第2段階と言える。この気づきや感じたことは「2, 感じたこと」として、新たに記される。これは分析メモのような役割もなす。

分析シートは、データベースではなく、2回目インタビューが1回目インタビューの流れに沿って語っていることを仮に想定して設計している。新たな話題へと膨らんだ場合は、セルを新たに挿入させて会話順にコピー＆ペーストをする（図参照）。どこで話題が膨らみ、どこは確認作業のみで済んだかがわかるように表示するための工夫である。

5. 論文執筆

1) 結果を綴る

結果の冒頭には必ず、「調査協力者と調査者の出会いから調査を依頼するまで」を記す。出会い・依頼の文脈を記すこと、そして「研究協力者のキャラクターや雰囲気が目につくように叙述すること」を心がける。拠点となるフィールドがある場合、その紹介をするための描写は必須である。この時「フィールドを訪れる度に記しているフィールドノート」（松田2021a,p.39）を参照する。これらを「地」として背景描写した上で、「図」にあたるインタビュー結果を、流れに沿って叙述するのが結果である（松田2021a, p.39）。インタビューの場で、調査者が経験したことの叙述ゆえ、呼称は「調査者」から「私」に替える。

インタビュー結果の叙述は、事例研究論文の面接経過報告のスタイルを意識して綴る。「筆者にとっては、身に馴染んだ面接経過の報告スタイル」であり、「大きな物語として、その情景が読み手にも伝わるように、再現されるように記述」（松田2021b,p.110）する。

インタビュー結果は、区切られた出来事（意味単位）たちが、ある筋をたどりながら編まれていく。その筋を読み込みながら流れを遮らぬように編集し、厳選された印象深い部分を引用し綴っていく。やりとりの引用もあれば、「筋を読み込む際に、その場で調査者が感じていたことや発言したことをそのまま引用することもある。こうして、二者間で語られたインタビュー結果は、論文執筆という場において、調査者を媒介し、第三者である一人一人の読者に届けられることになる」（松田2021a,p.40）。

松田（2022,p.156）は、前述の「編集」を「区切られた出来事（意味単位）」の流れを入れ替えることではなく、語られ、読み込んだ筋がわかるように叙述することを強調している。かつて用いていたインタビュー内容と執筆者の解釈をセットにした記述法ではない。「そ

の場の臨場感や二者間で交わされたやりとりの躍動感が失われぬように叙述する」(松田2022,p.157) 方法は、むしろ面接経過報告にみる綴りかたである。下手をすると、読者にはわかりづらくなるリスクを伴う。調査者の解釈をセットに「○○は～と語った」というような、整然とした説明を研究論文では目指すべきかもしれないが、捨てることにした。インタビューの場ではなく、執筆者の土俵で分析が展開するのを避けるためである。伝わるように心を砕くことまで捨てるわけではない。対話形式で書けば済む話でもない。「背後にある状況も示しつつ読み手も巻き込み参加できるように、読み手にさらなる連想が触発されることを意識して記述する手法を探り書き記している」(松田2022,p.157)。

実際は試行錯誤と言わざるを得ない。分析シートを見ながら結果を綴る。そこで、仮の、コードは再々改訂され、最後は結果の見出しになる。区切られた出来事(意味単位)のまとまりも再結合したり分解されたりする。しかし、面接経過報告において面接回を入れ替えた叙述をしないのと同様に、語られた流れ、文脈は脱文脈化することなく記すことだけは貫かれている。できるだけ主語は調査協力者になるように、執筆者(調査者)の説明にしないように、あとづけの判断は保留し、勝手な言い換えや解釈を挟まず、多様な解釈に開かれる隙間を残した叙述を志す。読み手が、調査協力者と出会えることを意識して結果を綴る。

結果を綴る作業は、分析作業の第3段階でもある。事例研究報告でも同様であろう。

2) 考察を書くー事象から表象そして抽象へ

結果に記した調査協力者が綴る経験の物語＝「事象」を元に、考察では、「表象」、「抽象」へと論を進めることになる。「事象」から徐々に抽象度を上げていく過程において、「表象」の記述はとりわけ重要となる。

松田(2019,2021a,b,2022,2023,2024)は、まず経験の物語として綴られた「事象」を辿る作業から始めている。「私が伺った○○さんの物語をたどる」のである。

次に、研究上の問いに対してどのような応答がなされているのかを読み込むステップに進む。「事象」に綴られた物語の筋は、ここで初めて語られた順番ではなく、出来事を時系列に並び替えたりして、物語のテーマごとに読み込む作業へと踏み込んでいく。ここでの考察主体は調査者であり、調査者が読み碎いた「表象」が描かれていく。この移行を丁寧に書くところこそが、不特定多数である読み手の思考を触発する導きになると考えられる。

辿る作業、調査者が読み碎いた「表象」を描く作業で重要なのは、「区切られた出来事(意味単位)」や惹きつけられた言葉たちとの連関について、編み目を探り探索し記すことである。これは決して一つの物語にまとめ上げる作業ではない。あれもこれもあって当然。整合性など考えず、読み取りうる物語を記しながら、テーマに関わる連関を探り記していく。この作業において、接続詞をどうおくかは重要であり、安直に望む筋書きに導く接続詞を用いぬよう、吟味する。

最後の考察では、調査協力者の経験の物語によって学んだことを、抽象度を上げて論じる。帰納的な展開が延々と続く。しかし、一切の演繹的な思考を働かせないわけではない。知識を蓄えて生きていたものとして、働かないわけがない。それは展開する対話として記述する。しかし、既知の知見を当てはめて、権威づけをし、調査協力者の経験にお墨付きを与えるような失礼な考察はしない。むしろ、新たな知見として、または既知の知見が読み碎かれ、学びはぐされていく論考を考察として綴る。「抽象」においてなすことは、一般化や法則の発見

ではない。類推を可能にすること、転用可能性に開かれていることこそが重要となる。ここに一事例を読み碎き、書き綴る意義があることを意識し記している。

書き上げるまで、1年以上かけるのが常である。ひとまず寝かしておくインターバルも必要だ。草稿への読み手の感想はリフレクティングとして活かし、何度も反芻し考え続ける。

III. 調査報告が公開されたら

公開されるに至った調査報告は、お礼の意味を込めて必ずご本人にお渡しする。協力フィールドも同様。以後、季節の便りは欠かさず届け、連絡が来れば必ず応じ関係を保ち続ける。

IV. 考察—調査事例研究法を象る

1. データ収集方法

今回、記した調査事例研究法では、2回インタビューを行うが、2回目インタビューは、1回目インタビューデータを見ながら（読みながら・聞きながら）、調査協力者の中の自己内対話の促進、連想を巡らせる機会として機能することを期待し行っている。ICレコーダーのスイッチを切った後のこぼれ話にこそ、ハッとする発見があることからの着想である。

楠見（2022,p.115）は協力者が参加した活動の映像記録を見せながら、活動の感想を語らせる「再生刺激法インタビュー」という方法を採用した研究を重ねている。「映像に関連する協力者自身にとっての重要な経験の想起を促すことを目的」としており、類似する手法と言えるだろう。しかし、筆者が積み重ねてきた調査事例研究法では、「語らせる」といった関係性ではなく、敬意と傾聴に努めていることだけは改めて記しておきたい。

2. 結果を綴るときに留意すること

佐藤（2008,p.42-46）は質的分析法のプロセスに、「脱文脈化と再文脈化」をおいている。脱文脈化とは、「特定のコードを割り当てた文書の部分を元の文脈から切り離した上でデータ分析を行うための素材ないし部品を作っていく作業（2008,p.46）」と記されている。一方、ここまで記した調査事例研究法では、徹底した文脈の読み込みを前段階に置いていることが特徴である。文脈を辿るという意味で「辿（てん）文脈化」と仮におきたい。「辿文脈化」によって「事象」が結果に提示される。つまり、「辿文脈化」では、元の文脈から切り離すことはしない。しかし、その場における理解や既知の知識を援用した解釈を一旦切り離す分解作業が入ることは記しておきたい。それを「脱文脈化」と言い換えることもできようが、誤解を招く恐れがあるだろう。あえて、「脱文脈化と再文脈化」を用いるとしたら、次の「表象」として連関を探る考察へ展開するときのプロセスが、位置づく営みといえよう。

3. 考察を記述する際に留意すること

結果を綴り、さらに考察を記述する際に、図と地でいうところの、地の部分へと地平を広げ記すことで、図としての個人の経験の意味の読み解きに広がりや深みをもたらされることは言うまでもない。Kleinman（1988/1996,p.IV-V）は患うという物語自体は、個人的経験、集合的経験、文化的表象という三角形の空間・あいだで経験されると記す。「病いとその物語

を社会的プロセスとしてよりよく理解できるように」(p.V)と記されていることに倣った記述である。

4. 質的研究法における調査事例研究法の位置

調査事例研究法の手続きは、調査者が、調査協力者の経験の物語を収集し、どのように読み砕いているのかを全面開示する方法と言える。当然ながら、実証主義に立つものではない。

大倉(2008)が着手する「語り合い法」は、『「質的データ」に客観的解釈を加えていくエスノメソドロロジーや物語論的アプローチ、協力者の語りを「一般モデル」の構築に用いるグラウンデッド・セオリー法やモデル構成的手法とは、はっきりと一線を画すものです(大倉2008,p.210)』とある。また「逐語録以上にその場の雰囲気や人々の「らしさ」を描き出し、考察していくことが求められる」(p.210)とあるのは、何を語ったかのみならず、いかに語ったのかを記す日々の臨床記録、事例研究報告においても留意すべきことであろう。当事者に学ぶことを是として臨床と研究を重ねてきたものにとって支えともなる(葛西2006,p.241)。

一方、方法論として、一般性に係る議論の中で、大倉(2008)は「語り合い法」を「〈一般的なもの〉の確認ではなく、「〈本質的なもの〉の発見によって、その「説明力・説得力」を訴える」ものであるとし、操作性への欲求ではなく、「人間的理解への欲求」であると述べる(p.105)。ここに支持を得た思いを抱く一方で、大倉がいう「〈本質的なもの〉の発見」、現象学における本質直観に一般性を見出す(p.93)ことに、調査事例研究法は重きを置いていないことを述べておかねばならない。

家高(2024,p.551)は、メルロ＝ポンティに依拠し、現象学的な研究における意味に関する3つの特徴を整理している。「本質直感としての意味」、「秩序としての意味」、「呼びかけとしての意味」である。調査事例研究法を現象学的な研究における意味に照らし合わせるならば、「秩序としての意味」と「呼びかけとしての意味」に重きをおく研究法と言えるやもしれない。

現在の質的研究にみるモダニズムとポストモダニズムの間の亀裂から「ポスト質的研究」の動きを紹介する楠見は(2024,p.197)、テキスト分析によって真実が掘り起こされるという伝統的質的研究の限界を述べ、研究法において「世界自体を詳細に問うことから、人々や研究者が世界をどのように見ているのかを問うことへと移された」(p.49)と論じる。これに、先述の現象学的な研究における意味を重ね合わせるとしたら、どこに行き着くであろうか。

よき事例研究に出会う中で、二度と同じ事例に出会うことはないにも関わらず、一事例を振り返り記したテキストが、他の事例の役に立つことを経験する、これは一体どういうことなのだろうか。他の事例の役に立つ一事例研究とは、どのような手続きのもと記されるのだろうか。調査事例研究法に対してもこの問いを投げかけたい。

筆者は、一事例の調査事例研究法において、「一般性」とは異なる「類推」と「転用可能性」に道を開く研究法であると先述した。西條(2003)が述べる「アナロジー的思考による一般化」(p.179)に依拠した位置付けである。しかし、「モデル構成的現場心理学」(西條2003,p.180-182)の提起は納めきれずにいる。構造や理論を根本から捉え返してみたとしても、他の事例に役立てようとしているときには、「継承」を超えた営みが生じているように思えるからだ。山川(2015,p.708-709)は事例研究の意味に係る河合隼雄の主張を辿り、「訓練の一環」と「個の追求から至る普遍性を導出する」という真意を見出し、「普遍性」「一般性」に関する方法論的検討の必要性を述べる。

「継承」,そして「個の追及から至る普遍性を導出する」を,先述した現象学的研究の意味に照らし合わせたとき,「秩序としての意味」・「本質直感としての意味」へ重ねて理解する道も見えてこようか。それに対し,調査事例研究法は,むしろ「訓練の一環」にその意味が見出される方法と言えるのかもしれない。現象学的な研究の意味における「呼びかけとしての意味」と重ねてみたものである。

本稿に記された調査事例研究法は,未だ,本質・普遍性に至らぬ説明力・説得力以前,一般性への応答も未展開である。それらを否定するものではないが,ケアの営みにおいて,本質・普遍性はすでにあるものとして辿るものであってはならず,ましてや一般性をよすがにすることへの戒めが先に立つのである。

筆者は心理臨床学における何らかの学派に立つものではない。ただ,文脈重視の認識論に立つことだけは言っていっておきたい。ケアの担い手でもある一研究者がひとり一人の語り,語られている世界をどうみているのかを開示する質的研究とも言える。読み手の思考の活性化を意図する方法であり,書き手がその場で生じていたプロセスを開示し,読み手を巻き込む記述する方法をもって場をつくり,読み手がそれをどのように感じ考え読むのかを喚起する方法であると記すのみである。たえざる対話の余白を残す方法と言えるだろうか。

認識論を明示せぬままでは方法論には至れない。今,たどり着いたところの調査事例研究法とは,類推という理解のカタを多様に活性化させることに力点を置いた方法であるとまとめられようか。

しかし,ここに臨床・研究・教育の三輪が寄与し合う道を筆者は見る。

引用文献

- 家高 洋 (2024) 現象学的な研究における「意味」とは何か. 看護研究, Vol.57 (6), 550-558.
- 葛西康子 (2006) 青年期を生きる精神障害者へのケアリング. 北海道大学出版会, 241.
- 楠見友輔 (2022) 健常児との交流の語りで生起する軽度知的障害児のアイデンティティ—記述的現象学的アプローチ. 質的心理学研究, 第21号, 110-128.
- 楠見友輔 (2024) アンラーニング質的研究. 新曜社, pp49, 197.
- Arthur Kleinman (1988) The Illness Narrative. Basic Books.江口重幸・五木田紳・上野豪志訳 (1996). 日本語版への序文. 病いの語り. 誠信書房, ppIV.
- 松田康子 (2019)「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく第1報—いちゃんへのインタビューから—, 臨床心理発達相談室紀要, (2), 67-90.
- 松田康子 (2021a)「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく第3報—高倉さんへのインタビューから—, 臨床心理発達相談室紀要, (4), 37-56
- 松田康子 (2021b)「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく第2報—さくらさんへのインタビューから—, 臨床教育学研究, Vol.9, 108-125.
- 松田康子 (2022)「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく—第4報 梅宮さんへのインタビューから—. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 140号, 155-178.
- 松田康子 (2023)「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく—第5報 美川さんへのインタビューから—. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 143号, 37-61.
- 松田康子 (2024)「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく—第6報 宇佐美さんへのインタビューから—. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 145号, 79-104.
- 大倉得史 (2008) 語り合う質的心理学. ナカニシヤ出版, 85-115.

- 西條剛央（2003）「構造構成的質的心理学」の構築．質的心理学研究，第2号，164-186.
- 佐藤郁哉（2008）質的データ分析法—原理・方法・実践．新曜社，42-46.
- 山川裕樹（2015）河合隼雄「事例研究の意義と問題点」の真意とその引用．心理臨床学研究，32（6），705-710.

Challenges of a Case Study-Based Interview as a Research Method

Yasuko MATSUDA

Key Words

qualitative research, research method, interview-based case study

Abstract

This report presents the case study-based interview, as an original research method designed by the author, and its procedures are described comprehensively and discussed. First, the setup of the encounter with the research collaborators, the structure of the interview, and the process of analysis are described. The interview survey is made up of two unstructured interviews of approximately 60 min each, the second of which includes listening to a story while reading the content of the first interview. Next, the main points for writing the paper and reporting the paper to the research collaborators are described. In the discussion, the aspects to be prioritized when describing the results and the placement of the interview-based case study among qualitative research methods are discussed. The interview-based case study is based on context-oriented epistemology. It provides an avenue for analogies and transferability and focuses on the activation of comprehending in a variety of motifs. However, in this research method, some methodological issues remain to be resolved.